

終章 地域発展の基盤としてのローカル・コモンズ

1. 地域発展における noro 概念の持つ負の側面

noro 概念は、ビチエ村のローカル・コモンズの基になる、資源を共同利用するうえでの正当性を示す共通認識であった。しかしながら、多様な開発を導入し、また開発をきっかけにローカル・コモンズを再構築していく過程において、noro 概念の各要素が内包する負の側面が表出していた。

盗伐や盗漁、伐採権料や魚販売利益などの着服に対して、厳しく諫めることを良しとしない「寛容さ」は、「負の寛容」とも言い換えられる。つねに「寛容さ」を示すことが noro とみなされるがゆえに、強い不満や非難の意思が表出することは稀であるものの、利益の着服などが続くと村人同士の信頼関係が少しずつ崩れていくことにつながっていくのである。それは、魚販売への積極的な関与を村人にためらわせることにもなっていた。

開発仲介者などに対する「負の寛容」は、商業伐採のような開発(外部者)がローカル・コモンズにすり寄ることを許し、商業伐採によるローカル・コモンズの混乱は、地域発展を阻害することにもつながっていた。

池田(2005:9)は、法や規則自体が「正しい」ものでなければ、いくら社会の成員が法や規則を遵守していても、環境の破壊や汚染が起き得ることを指摘している。これは、ある地域社会で慣習的に共通認識とされてきた正当性が、いかに人々によって尊重されたとしても、環境の破壊や汚染を招かず、また他地域に被害をもたらさないというわけではないとも言い換えられよう。

ビチエ村における noro 概念についても、「寛容さ」を内包するがゆえに、商業伐採の導入を許し、結果的に目に見える村の生活および自然への被害として、建築用樹木の枯渇化を招いたともいえる。

木彫り細工用樹木および一部の村人によるヤシガニの採集程度の利用しか行われていなかったブロ島の樹木が、木彫り細工用樹木などを除いて枯渇化しかねないことも、「寛容さ」によって受け入れ得るとされることにつながったのである。noro 概念は、必ずしもすべての自然に対して「保護」的なものでも、「持続的な利用」をすることにもつながらず、「環境破壊」的な側面も持っているといえよう。

「気前の良さ」についても、負の側面を持っていた。

伐採企業やプレスリーのような商業伐採の仲介者が、村人全体に多くの利益をもたらし、村人らに「気前の良い」振舞いを行うと期待していたことが、商業伐採の導入に繋がっていた側面もあった¹⁴⁶。

¹⁴⁶ サゲオナ村における商業伐採契約は、気前の良い振舞いが契約の締結に結びついた事例のひとつであった。村を訪れた伐採企業幹部らが、村人にジュースやビスケットなどを大量に振舞い、その気前の良さに村人が大喜びしている間に、村の老人の1人に契約書にサインをさせていた。

また、「気前の良さ」を示すことが求められることによる、ホニアラでの魚の提供、安売りは、魚販売の減益をもたらしていた。

「働きかけ」の重視については、魚販売において、海に働きかけを行った者（つまり漁労活動を行った者）が利益を得られるという解釈、主張に結びつき、村人同士での「気前の良い」振舞いや「相互扶助」の活発化を妨げる、という負の側面を持っていた。

「相互扶助」の重視は、村全体での建築作業という「相互扶助」が、魚販売という開発よりも優先され、魚販売が中断されるに至った主要な要因のひとつにもなっていた。「相互扶助」の重視、活発化も、魚販売という開発の成功にのみ目を向けるのであれば、負の側面を持っていたといえよう。

noro 概念の 4 要素は、その活発化もしくは共通認識の強まりが、村人の求める「豊かさ」に結びつくこともあれば、また地域発展を妨げる負の側面が、前面に出てくることもありうるのである。ローカル・コモンズを基盤にした地域発展は、ローカル・コモンズ自体が内包する要素が正と負の両側面を持ち、地域を混乱や衰退にも向かわせるという困難さを持っているといえよう¹⁴⁷。

2. 求める地域発展の姿のずれ

noro 概念という共通認識を持つ人々の範囲が変わり、求める地域発展の姿がずれていくという難しさもある。

ビチェ村の人々は、ビチェ村に暮らす VP 集団を、noro 概念という共通認識を持つ「核」としていた¹⁴⁸。しかしながら、その「核」の周辺にいる人々、すなわち他村の M 集団の人々や VP 集団、マロアナ集団などとのつながりを断ち切っているわけではなかった。地域発展の模索過程において、「核」の外に伸びるつながりも部分的に相互利用ネットワークのなかに加え、多様なものが獲得されていた(表 7-1)。

サゲオナ村の人々は、こんなに気前の良い伐採企業であればどんな利益をさらに村にもたらしてくれるか、と大きな期待を抱くことになったのである。

¹⁴⁷ 前述のように、内発的発展論は「文化遺産（伝統）」や「自立的な発展」、「地域のアイデンティティ」を重視している。noro 概念を基盤にしたローカル・コモンズの持つ負の側面は、地域社会の持っているもの、形成してきたものが、内発的発展の妨げにもなりうることを指摘することができる。

¹⁴⁸ ビチェ村を核として相互利用ネットワークを維持していくことは、島内の他村の社会や資源への無関心につながることもなりうる。bangara であるハローニは、商業伐採などを導入し続けるベンジユク村などの人々に指導力を発揮していくことを放棄していた。イアニは、ベンジユク村のチーフであったが、ベンジユク村をまとめていくことをあきらめ、ビチェ村に居住し続けることを選んでいた。土地紛争を嫌うソンビロ村住民がビチェ村への移住を希望してもいた。

ビチェ村の人々は、vusivusi がはびこり、勝手な土地所有権の主張を行い、また商業伐採などの導入を繰り返す他村を冷笑していた。2005 年には、ベンジユク村で伐採対象地の地すべりが生じていたが、ビチェ村の人々は自らには関係の無いことだとしていた。

noro 概念を共通認識としてまとまったビチェ村の姿が、他の周辺地域にどのように映るのか、そしてどのような波及的な影響を与えうるのか、今後も強い関心を持って見ていきたいと考えている。

表7-1 ビチエ村の人々が地域発展の模索過程で獲得した主なものと利用したネットワーク

利用したネットワーク	獲得した主なものとその方法、獲得年
相互利用 ネットワーク	VP集団 移動手段: コブラ販売収入を村人全体で出し合って船外機購入(1984年) 教育: 他村で教職などに就く成員の尽力による小学校の政府直轄化(2005年) 収入源: 伐採権料(1998年-2005年)、都市在住の成員から製材機(2001年)
	M集団 電力: M集団である国会議員から発電機(1998年) 建築材料: 建築用樹木(-2005年)、M集団である国会議員から教会建設資材(2004年) 収入源: 伐採権料(1998年-2005年)
	マロアナ 集団 建築材料: 建築用樹木(-2005年) 収入源: 伐採権料(1964年、1994年、1998年)、魚介類(-2005年)
ローカル・コモンズ 外のネットワーク	政府 収入源: 農業局からカカオの種(1979年) 近代医療: ソロモン諸島政府から無料の近代医療薬(1990年-2002年) 通信手段: ニュージーランド政府から無線機(1999年) 電力: ニュージーランド政府から無線機用の太陽光発電機(1999年)
	伐採 企業 伐採用具: 伐採企業からチェーンソー(1997年、1998年) 移動手段: 伐採企業から船外機(1998年、2001年) 建造物: 伐採企業から学校建築資材(1999年) 収入源: 伐採権料(-2005年)

出所)聞き取り調査より作成した。

注)キリスト教徒化によって、村人が得たものもあると考えられるが、キリスト教を村人が望んで獲得したかどうかの判断がつかかねるため、本表では除いた。

しかしながら、ビチエ村に暮らす VP 集団が求める地域発展の姿と、都市部や他村の VP 集団が求めるものとの間にずれが生じることもあった。

現金収入の獲得のみを目的として商業伐採を進めたプレスリーと、共同利用資源である建築用樹木の枯渇化を危惧しつつ、焼畑用地としての伐採跡地の利用も進めていこうとしていたビチエ村の人々とは、商業伐採に求めるものに大きな違いがあった。

また、都市部の公務員とベカベカ中高等学校の教員である VP 集団の成員らが試みた、村外就労を目的とする教育の推進およびトイレの個室化の失敗も、求める地域発展の姿にずれが生じた事例として挙げられる。

教育については、読み書き計算など基礎学問を学んで村での生活に活かされれば十分であるという考え方をする父母が多く、都市部や他国で働けるように忍耐強く学び続けて高い学歴を得ようとする子どもたちも稀であるため、みなで子どもたちの高学歴化を進めようという動きが実体化することはなかった。

教育は、個人のためというよりもむしろ、他の村人のために手紙を書いたり、読んだり、また聖書の解説をし、計算などができるようになることで、村全体の役に立つようになるために必要だという認識を、村人は持っていたのである。

トイレについては、衛生面の「向上」のために個室を作り、トイレトペーパーの利用を進めようとしたものの、村人らは汚く狭い個室で使い慣れないトイレトペーパーを利用するよりも、浜辺の開放感、海水でお尻を洗うことの快適さ、連れウンチの楽しさ、トイレ場所の選択の自

由をより良いと評価した¹⁴⁹。

他出したVP 集団の成員らは、村人とは異なる地域発展の目標を持ち、それを村人らと共有することに失敗したといえよう¹⁵⁰。

3. 地域発展における外部者の関わり

ビチェ村のローカル・コモنزの動態から見えてくる、ローカル・コモنزを基盤にした地域発展とはどのようなものなのだろうか。

それは現金収入や船外機、小学校などの設備を獲得しつつ、より noro であり、「豊か」と認識するローカル・コモنزを形成し、また再構築していく過程そのものであった。村人が獲得したいと考えるものはその都度、変化していく。また状況に応じて、より noro だと強調される要素も変化していくという難しさを持っている。

村人の求める「豊かさ」は、時によってまた場所や人によっても変わっていくのだろう。生活の質の向上や自給を基盤にした生活の安定などが「豊かさ」とされることもあろう。現状の維持という、変化しないことがあるべき地域の姿として捉えられることもありうる。地域発展とは、

¹⁴⁹ 村人のなかには、ホニアラに滞在した際にも、居候宅の個室トイレを使わずに浜辺まで数十分歩き、用を足す者もいた。

¹⁵⁰ マロアナ集団のように、ビチェ村の人々と近い関係にある親族集団による、ビチェ村の資源利用について、本稿では詳述してこなかった。しかしながら、相互利用ネットワークの成員にもなりえ、また「近い」外部者とも位置付けられる周辺親族集団との関わりも重要であると考えている。

2005年12月には、ヴァングヌ島ニニベ (Nineveh) 村とザイラ (Zaira) 村のマロアナ集団の人々が、ビチェ村を訪れ、結婚式用にマングローブオオトカゲを5匹、クスクスを4匹、オオウナギを30匹獲っていた。ニニベ村、ザイラ村の人々はユナイテッド教会 (旧メソジスト派) のキリスト教徒であり、これらは食禁忌とされていない。ビチェ村の人々は、過去にもマロアナ集団の人々がビチェ村を訪れてクスクスなどを獲ることを快く認めていた。

しかしながら、2004年以降、ニニベ村やザイラ村の人々は、補償金を受け取る代わりに WWF の指導に基づいた森林および海洋資源の管理を行い、伐採禁止区域や禁漁区、禁漁期間を設けるようになっていた。居住者以外の他村者による漁労も禁じられたため、ビチェ村の人々もニニベ村、ザイラ村周辺海域での漁労活動ができなくなっていた。ビチェ村の人々がヴァングヌ島周辺で漁労活動を行うことはまれであったが、村人はマロアナ集団というつながりを基に行われてきた漁労活動が認められなくなったことに不満を感じていた。

また、ビチェ村の人々の一部は、ニニベ村やザイラ村に優先利用権のあるココヤシ林を持っていたが、居住者らによって勝手に利用されていると認識していた。

そして2006年以降、ビチェ村の人々は、ニニベ村やザイラ村の人々によるビチェ村および周辺海域の資源利用を拒んでいく考えがあるとしていた。またビチェ村の子どもの1人が、ニニベ村の人々のオオウナギ獲りなどを「盗み (chiko)」と認識し、ニニベ村の村人のナイフを報復として盗んでいた。他村、他島にまでまたがる親族集団のつながりや相互利用ネットワークは、外部者である WWF による厳格な規制の設定によって脅かされる可能性を持っているといえよう。

ザイラ村周辺地域では、2006年に SP 社による商業伐採が計画されていた。2005年12月の来村時には、ザイラ村の人々はマロアナ集団でもあるハローニやイアニなどに商業伐採に賛成してくれるように頼んでいた。

M 集団や VP 集団のみでなく、マロアナ集団のように近接する親族集団との資源利用における関わり、またそこに伐採企業や国際協力 NGO などがどのように関わってくるのか、注視していきたいと考えている。

完璧な発展というゴールがあるものではなく、多様な「豊かさ」に向かう試行錯誤過程そのものではなからうか。

ソロモン諸島は、慣習的な資源の共同利用が法的にも実質的にも認められており、資源を自家消費目的もしくは収入を獲得するために共同利用する人々が生活してきた地域、と位置付けられる。資源の共同利用を柱とするローカル・コモンズを基盤にした地域の発展においては、どのような資源利用が *noru* とみなされるか、といういわば資源管理のあり方の模索が、試行錯誤過程の重要な一部分を占めることになる。

井上(2004)は、地域の自然資源への関わり深さに応じて発言権を認められた、多様な関係者による自然資源の「協治」を進めるべきだと論じている。

「地域の自然資源に関わろうとする外部者および、外部者らが対象とする資源とその管理制度」を「外部者の資源管理」と呼ぶこととしよう。

ここでいう外部者とは、ローカル・コモンズにおける相互利用ネットワークの外部にいる者であり、地域のいずれの資源に関しても成員利用権が認められていない者を指す。ビチェ村の事例で言えば、ビチェ村の居住者でも M 集団でもない他村者や伐採企業などが、外部者に当たる。

「外部者の資源管理」が対象とする自然資源やその管理制度は、ローカル・コモンズのそれと完全に重なり合うわけではない。自然資源に関わる目的も対象とする資源も、外部者によって異なることが多いと想定すべきであろう。

例えば、教会や植民地政府関係者らは、資源の利用許可を得やすくするという目的のもとにガトカエ島を四分化し、*bangara* の下にチーフを置くよう働きかけた。カカオ栽培を指導した農業局は、小集団ごとの栽培区画を作らせた。

商業伐採では、伐採企業が建築用樹木に大きな経済的価値を付与するとともに、素早く大量の樹木を伐採することを目的に多くの村人を雇用し、村の生活のなかに雇用労働という労働形態を持ち込んだ。

地域発展においては、各地域が互いに発展を阻害せず、また資源の地域差を埋めるように助け合いながら、相互に発展していくことが理想的な姿のひとつと考えられる。「協治」は、多様な地域や組織に属する人々が協力して資源管理を行う、という理想に則った仕組みともいえよう。

これらを現実離れした理想論だと片付けることもできるが、地域住民の視点に立てば、外部者は、資源管理のみでなく地域発展のための基盤として利用できる、という側面を持っている。ローカル・コモンズと「外部者の資源管理」が部分的にすり寄り、また離れつつ資源管理のあり方を探ると同時に、ローカル・コモンズとそこに関わろうとする外部者が基盤になり、地域発展を模索していくのである。

ビチェ村の人々は、「気前の良さ」、「寛容さ」、「相互扶助」に加えて、「働きかけの重視」を核とする *noru* 概念を形成し、また「したたかな壁」によって、外部者に対応するようになりつつあった(図 6-8)。

「したたかな壁」を形成する「ケチ(利己的・わがまま)」、「厳格さ」、「雇用労働の重視」、「境

界の強調」は、それぞれ「気前の良さ—ケチ」、「寛容さ—厳格さ」、「相互扶助—雇用労働の重視」、「働きかけの重視—境界の強調」という形で、noro 概念の各要素に対応する。

これらを、それぞれ村人が重視しようとする方向を示す軸として、またその方向に促していく力として用いて、ローカル・コモンズと「外部者の資源管理」が基盤となった地域発展を図化したものが、図 7-1 である。

ここでは、「気前の良さ—ケチ」、「寛容さ—厳格さ」、「相互扶助—雇用労働の重視」、「働きかけの重視—境界の強調」という 4 本の方向軸が、地域社会（部分的に外部者を含む）を、地域発展にも、地域衰退にも進めうる上向き、ときに下向きに変わる上下可変的な軸になると想定している。

ローカル・コモンズと「外部者の資源管理」は、地域の発展を志向する上向きの力に引っ張られながら、またローカル・コモンズや「外部者の資源管理」を構成する何らかの要素の負の側面という下向きの力（例えば noro 概念の負の側面）に引っ張られながら、動き続けることになる。この動態の過程こそが、地域発展（衰退）なのである。

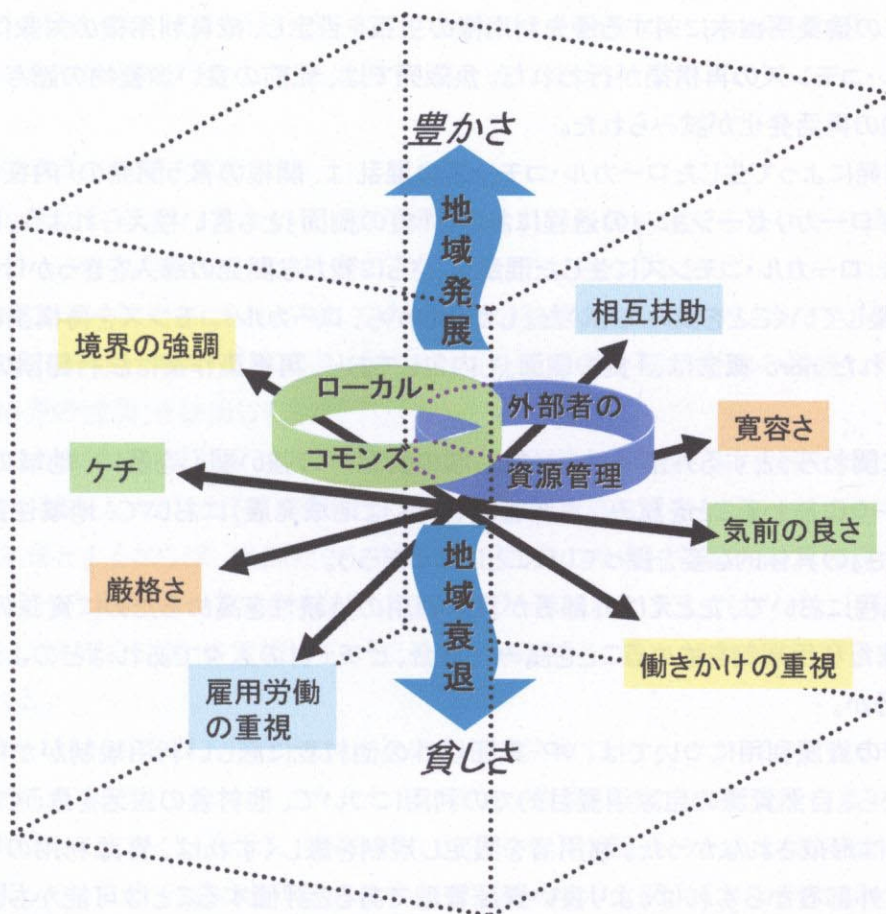


図7-1 ローカル・コモンズと外部者の資源管理を基盤にした地域発展モデル

注) 外部者がローカル・コモンズにおける相互利用ネットワークに加わっていくことで、外部者の資源管理が地域発展の基盤となっていくこともイメージしている。

ビチェ村の人々も、外部者との関わりを拒んできたわけではなく、ローカル・コモンズの変容の多くは外部者との関わりの中かで生じていた。

関根(2001)は、「島民が新たな外来の影響に触れたときに在来の文化要素に基づく文化的操作を介して外来のものを理解し、自らの判断で集团的、個人的に利用(操作)することのできる状態」を、「内在化」と呼んだ。

また前川(2004:10)は、「グローカリゼーション」を、「グローバリゼーションの波が世界の各地域に到来した際の、対象社会によるズレを伴う受容を『ローカリゼーション』の過程として記述するための概念」として用いている。

「内在化」や「グローカリゼーション」は、ローカル・コモンズに外部者が押しかけ、またすり寄っていくなかでのローカル・コモンズの対応もしくは受容過程を示す概念とも言い換えられよう。

ビチェ村の事例では、旅客船や漁船などの外部者の来島に対して、資源の成員利用権や優先利用権の対象を、利用目的に応じてM 集団からVP 集団に限定し、また部分的に有償化するような「したたか」な対応を行っていた。また、製材販売をきっかけに、商業伐採導入時に行われた野生の建築用樹木に対する優先利用権の主張を否定し、成員利用権の対象に戻すというローカル・コモンズの再構築が行われた。魚販売では、気前の良い漁獲物の贈与・分配、相互扶助活動の再活発化が試みられた。

何らかの開発によって生じたローカル・コモンズの混乱は、関根の言う開発の「内在化」や前川のいう「グローカリゼーション」の過程における「負の側面」とも言い換えられよう。ビチェ村の事例では、ローカル・コモンズに生じた混乱を、さらに新たな開発の導入をきっかけとして修正し、再構築していくことを試みてもいた。しかしながら、ローカル・コモンズを再構築していくうえで基にされた *norō* 概念は、「負の側面」も内包しており、再構築作業は試行錯誤の連続であった。

資源管理に関わろうとする外部者は、対象地域の資源への強い関心を基に、地域の相互利用ネットワークに加わることを試み、資源管理(もしくは地域発展)において、地域住民と共有しうる「豊かさ」の具体的な姿を探っていくことになるだろう。

その模索過程において、たとえば外部者が資源利用の持続性を高めるために資源の利用者を限定し、また利用規制を強めることを試みた場合、ビチェ村の人々であればどのような反応を示すだろうか。

販売目的での資源利用については、VP 集団以外の他村者に厳しい利用規制がかけられた。しかしながら、自然資源の自家消費目的での利用について、他村者の生活を危うくするような利用規制は形成されなかった。利用者を限定し規制を厳しくすれば、資源利用の「持続性」は高まり、外部者からすれば、より良い資源管理であると評価することは可能かもしれない。しかしながら、地域社会の人々が過度な規制を嫌い、寛容に気前よく振舞うことを良しとするならば、成員の限定や利用規制の厳格化は、地域発展に結びつかないだろう。資源利用の持続性を高めるための規制の強化は、地域社会の「豊かさ」を失わせることにもつながるのである。

資源管理のあり方は、常に試行錯誤するものであって、それが地域社会の人々がより良い、もしくは *norō* と認識する地域発展を志向する力に引っ張られているとき、その試行錯誤過程は地域発展の一部となるのではなかろうか。

また、試行錯誤という過程のみでなく、何らかの成果が出た際にもそれを地域の中に還元させていく方法によって、それが地域発展とみなされるかどうか、変わってくると考えられる。たとえば、外部者との関わりのなかで何らかの資源が収入源となり、多くの利益を村人が手にするようになったとしても、その結果みな利益の獲得のためにのみ働き、「相互扶助」的な活動が廃れ、雇用労働のみが重視されるようになったとすれば、それをビチェ村の人々は *norō* 概念に則った地域発展とは捉えないだろう。

一部のビチェ村住民が高度な教育を受け、都市部や外国で高収入もしくは高い社会的地位を得たとしても、それはその住民個人にとっての発展であって、たとえビチェ村からそのような個人が多数輩出されたとしても、必ずしも地域発展と捉えられるわけではない。おそらくそのような個人は、ビチェ村の人々に「気前良く」自らの利益を分配し、また村人の生活に寄与するような「相互扶助」的な活動を頻繁に行うことを求められるであろう。多くの利益の獲得や優れた個人を輩出していくその過程、そしてその結果が、ビチェ村の人々の認識する *norō* 概念から外れたものであればそれは地域発展ではないのである。

4. 今後の地域発展に向けて

本研究が対象としてきたのは、自然資源とそれを共同利用する人々が形成する相互利用ネットワークを基盤とした地域社会の発展であった。そのなかで、ローカル・コモンズにおける *norō* 概念の 4 要素と、それに対して地域社会の動態のなかで形成されてきた方向軸、すなわち「気前の良さ—ケチ」、「寛容さ—厳格さ」、「相互扶助—雇用労働の重視」、「働きかけの重視—境界の強調」を抽出してきた。

しかしながら、地域社会は多様である。発展の基盤とするものも、目標もまた多様である。

ビチェ村の人々が、ガトカエ島(とくにビチェ村内)の自然資源とビチェ村の VP 集団を地域発展の基盤とするならば、内部社会に対しては「気前の良さ」、「寛容さ」、「相互扶助の重視」、「働きかけの重視」という方向に、そして同時に外部社会に対しては「ケチ」、「厳格さ」、「雇用労働」、「境界の強調」を重視していくことで、地域発展に向かっていくことが可能であったと考えられる。

しかしながら、発展の主体となり、その目標を決めていく人々が何を重視するかによって、形成される方向軸は変わり、またそれらが地域を発展に向かわせるのか、衰退に向かわせるのかも変わっていく。例えば、多くの人々が現金収入の獲得のための諸活動を重視して発展を模索しているのであれば、「気前の良さ」や何らかの「名誉(もしくは見栄や権威)」、もしくは「自家消費目的での資源の獲得」を重視することは、発展を阻害することにもなりうる。

また人々が「利益(もしくは収穫)の最大化」を目指すのか、それとも「平準化(もしくは必要最小限化)」を求めるのかによって、そこで重視される諸要素とそこに関わる方向軸についても、発展につながるのか、衰退に向かわせるのか、大きく変わってくるだろう。

このほか、「効率化の重視—儀礼・儀式の重視」、「個人の重視—地域社会(もしくは親族集団、場合によっては国家)の重視」、「外部社会への依存—地域住民主体」など、何を目標として(またその目標に至るための道筋として)重視していくのかによって、様々な方向軸が考えられる。

発展とは何か、豊かさとは何か。そして、これらをどのように捉え、また社会において、これらを現実化していくのか。その答えを得るのは、容易ではないが、多様な地域社会の動態を把握していくことは、そのための第一歩となるであろう。

筆者は、ビチェ村のローカル・コモنزのなかに組み込まれ生活してきた。その一方で、外部社会に属する研究者でもあった。

ビチェ村に暮らしながら、ローカル・コモنزの動態を探り、村人が資源を共同利用するなかで筋が通っているとみなす、すなわち正当性を示す noro 概念を把握していった。noro 概念の 4 要素は、村人の行動すべて、村人の頭の中、価値観すべてを表現しえないかもしれないが、それらを解釈する重要な手掛かりになるものであった。それは、魚販売という開発を試行していくなかで、村人が求める「豊かさ」に結びつく地域発展を探ることに結びついた。

また 4 要素は、魚販売を実施することにもつながった一方で、中断した要因にも大きく関わっていた。魚販売を中断した要因が 4 要素と関わっていたからこそ、中断することが noro とする共通認識として村人らに受け止められたとも解釈できよう。地域社会内部の正当性概念を把握することは、そこに外部社会が関わっていくための手掛かりにもなり、また手を引くことの正当性にも結びつきうるのである。

ビチェ村は、豊かな自然資源に恵まれた村であった。そして、やや揺らぐことはあったものの、周囲の村々が羨むほどのまとまりを長年にわたり保ってきた。まさしく、資源を共同利用する親族集団という「血」とその資源を共同利用した「生活」を根幹にした地域であり、その試行錯誤は、地域発展に向けた模索過程であった。しかしながら、「地域」としてのまとまりの基にもなる「生活」における noro 概念という共通認識は、それ自体が持つ負の側面が、地域発展の阻害要因ともなっていた。

noro 概念のような共通認識も、「血」の繋がりも(その濃さは相互利用ネットワークの関わりの密度で決まってくるのかもしれない)、薄れていったとき、地域発展は、個人の、もしくは家族ごとの豊かさの追求に変わっていくのであろう。それは、地域社会が、地域社会というまとまりでの発展に向けた試行錯誤をあきらめたことを意味する。地域社会が地域の多様な資源を基盤にして、積み上げ、形成してきたローカル・コモنزや、試行錯誤過程から再構築した新たな概念や制度、叡智の敗北でもある。そのツケや負債(地域社会の崩壊や各個人、家族ごとの格差の拡大、結びつきの薄れなど)は、地域社会の人々が支払っていくことになるだろう。

また、本研究が残している課題も数多い。例えばビチェ村で魚販売が成功し、地域発展に向かったとき、それが地域のまとまりを失いつつある村々にどのように波及しうるのか、また地域をよく知る(よく知ろうとする)地域研究者という外部者が、地域発展においてどのような役割を果たしうるのか、そこに言及するには至っていない。

本研究では、ローカル・コモنزに外部者(外部社会)が関わっていく動態を描いてきた。そ

して、ローカル・コモンスのなかで重視されてきた共通認識と外部者との関わりのなかで新たに形成されてきた概念を提示した。そして、地域社会を上下左右いずれにも動かす方向軸として、地域発展(衰退)という縦軸のなかに組み込んだ。それは、地域発展におけるローカル・コモンスと外部者、そしてローカル・コモンスの形成してきた諸概念の関係性の明示を試みたものであり、何らかの地域発展の理想や評価をするためのものではない。

本研究では、地域の(そしてそこに外部者が加わった)試行錯誤が、果たして地域を発展させたのか、衰退させたのか、具体的な指標や数年間の単位で評価することを目的とはしなかった。ただ、ビチェ村の人々の地域発展に向けた試行錯誤を捉えることを試み、その地域発展モデルを提示したのみである。村人の試行錯誤が止まることがないのであれば、このモデルは今後の動態を把握していくための羅針盤にもなるであろう。

地域の人々が、発展に向けて試行錯誤を続けていくのと同時に、研究者としてそこに寄りつつ、また離れつつ彷徨していくこと、異なる地域社会・外部者がそれを互いに認め合えること、それだけが、地域を発展させる(発展に向けて試行錯誤させていく)条件のように感じられない。

一時的なブームに乗り、また自己の欠損部分を埋めるための自己満足に終始するような外部者が、その都度異なる耳当たりの良い美辞麗句、「普遍的」な価値観を押し付けることも、大金や名声に流され、魅かれた外部者がいたずらに多数、押しかけることも、また「伝統」や「慣習」を妄信し、これらを固定化して捉えることも、地域発展のための試行錯誤を阻害していくのではなからうか。地域が発展に向けて試行錯誤し続けようとするその力を削ぐのではないか。

ビチェ村の人々が、自然資源とそれを共同利用する人々の相互利用ネットワークを基盤にしながら、また外部者と関わりながらどのように地域発展を模索していくのか、単なる傍観者ではなく1人のビチェ村の村人として、また外部社会の1研究者として、今後も関わって行きたいと考えている。そして、さらに多様な地域社会を歩き回しながら、発展とは何か、豊かさとは何か、探し求め続けて行きたい。

引用文献

- 赤松啓介(1986)『非常民の民俗文化—生活民俗と差別昔話』明石書店.
- 秋道智彌(2004)『コモンズの人類学—文化・歴史・生態』人文書院.
- Allan C. H. (1957) Customary Land Tenure in the British Solomon Islands Protectorate, Western Pacific High Commission.
- Amin S. (1973) *Le développement inégal*=西川潤訳(1983)『不均等発展』東洋経済新報社.
- 荒谷明日児(1995):「ソロモンの林業と林産業」『山林』No. 1336:62-63.
- 綾部恒雄(1993)『現代世界とエスニシティ』弘文堂.
- Bennett J. A. (1987): *Wealth of the Solomons: A History of a Pacific Archipelago, 1800-1978*, University of Hawaii Press.
- Bennett J. A. (2000): *Pacific Forest: A history of Resource Control and Contest in Solomon Islands, c. 1800-1997*, The White Horse Press.
- Bernard J. (1973) *The Ecological Model, The Sociology of Community*, Scott, Foresman and Company:33-50.
- Cardoso F. H. and Faletto E. (1979) *Dependency and Development in Latin America*, University of California Press.
- Central Bank of Solomon Islands (1999) *Annual Report 1998*, Central Bank of Solomon Islands.
- Central Bank of Solomon Islands (2002) *Central Bank of Solomon Islands Annual Report 2001*, Central Bank of Solomon Islands.
- Central Bank of Solomon Islands (2003) *Central Bank of Solomon Islands Annual Report 2002*, Central Bank of Solomon Islands.
- Central Bank of Solomon Islands (2004) *Central Bank of Solomon Islands Annual Report 2003*, Central Bank of Solomon Islands.
- Central Bank of Solomon Islands (2005) *Central Bank of Solomon Islands Annual Report 2004*, Central Bank of Solomon Islands.
- Central Bank of Solomon Islands (2005) *Quarterly Review December 2005*, Vol. 17, No. 4.
- Central Bank of Solomon Islands (2006) *Central Bank of Solomon Islands Annual Report 2005*, Central Bank of Solomon Islands.
- Chambers R. (1997) *Whose reality counts?: putting the first last*=野田直人・白鳥清志監訳(2000)『参加型開発と国際協力:変わるのはわたしたち』明石書店.
- Cornia G. , Jolly R. and Stewart F. eds. (1987) *Adjustment with a Human Face: Protecting the Vulnerable and Promoting Growth*, 2vols. , Clarendon Press.
- Dauvergne P. (2001) *Loggers and Degradation in the Asia-Pacific: Corporations and Environmental Management*, Cambridge University Press.
- Dos Santos T. (1970) *The Structure of Dependence*, American Economic Review, Vol. 60,

- No. 2:231-236.
- Dreze J. , Sen A. K. and Hussain A. ed. (1995) *The Political Economy of Hunger*, Clarendon Press.
- 絵所秀紀(1997)『開発の政治経済学』日本評論社.
- Foye J. (1976) *Custom Medicine in Moli District, Guadalcanal*, *The Journal of the Cultural Association of the Solomon Islands*, No. 4:10-39.
- Frank A. G. (1967) *Capitalism and Underdevelopment in Latin America* = 大崎正治他訳 (1976)『世界資本主義と低開発』拓植書房.
- 福島理栄子(2004)「開発に生きる女性たち」大塚柳太郎編『島の生活世界と開発(1)ソロモン諸島—最後の熱帯林』東京大学出版会.
- 古澤拓郎(2002)「ソロモン諸島ロヴィアナラグーン住民の民俗生態学的知識、生活と開発」『アジア・太平洋の環境・開発・文化』No. 4:36-63.
- 原田一宏(2001)「熱帯林の保護地域と地域住民—インドネシア・ジャワ島の森」井上真・宮内泰介『コモンズの社会学—森・川・海の資源共同管理を考える』新曜社.
- 畑中幸子(2000)「メラネシア人」石川栄吉・越智道雄・小林泉・百々佑利子監修『オセアニアを知る事典』平凡社.
- Henderson C. P. and Hancock I. R. (1988) *A Guide to the Useful Plants of Solomon Islands*, Research Department, Ministry of Agriculture and Lands.
- Hirschman A. O. (1958) *The Strategy of Economic Development* = 麻田四郎訳(1961)『経済発展の戦略』巖松堂.
- 保母武彦(1996)『内発的發展論と日本の農山村』岩波書店.
- Hviding, E. (1995) *Kiladi oro Vivineidi Tongnia Ria Tingtonga Pu Ko Pa Idere oro Pa Goana Pa Marovo: Reef and Rainforest: A Dictionary of Environment and Resources in Marovo Lagoon*, University of Bergen.
- Hviding E. and Bayliss-smith T. (2000) *Islands of Rainforest: Agroforestry, Logging and Ecotourism in Solomon Islands*, Ashgate.
- Hviding, E. (2005) *Kiladi oro Vivineidi Tongnia Ria Tingtonga Pu Ko Pa Idere oro Pa Goana Pa Marovo: Reef and Rainforest: An Environmental Encyclopedia of Marovo Lagoon, Solomon Islands*, UNESCO.
- ILO (1972) *Employment, Income and Equality: A Strategy for Increasing Productive Employment in Kenya*, ILO.
- ILO(1976) *Employment, Growth and Basic Needs: A One-World Problem*, ILO.
- 井上真(2001)「自然資源の共同管理制度としてのコモンズ」井上真・宮内泰介編『コモンズの社会学—森・川・海の資源共同管理を考える』新曜社.
- 井上真(2003)「揺れうごく住民参加の森林政策」池谷和信編『地球環境問題の人類学—自然資源へのヒューマンインパクト』世界思想社.
- 井上真(2004)『コモンズを求めて』岩波書店.

- 石森大知(2004)「商業伐採の受容にともなう『伝統』と『近代』の葛藤」大塚柳太郎編『島の生活世界と開発(1)ソロモン諸島—最後の熱帯林』東京大学出版会.
- Joseph F. G. (1979) Some Plant Medicines of To'Ambaita, North Malaita, Solomon Islands, *The Journal of the Cultural Association of the Solomon Islands*: 13-26.
- 嘉田由紀子(1998)「所有論から見た環境保全—資源および途上国開発問題への現代的意味—」『環境社会学研究』第4号:107-124.
- 川田順造(1997)「民族と国民国家」『民族学研究』第62巻第1号:110-115.
- 川田侃(1989)「あとがき—本書の構成と成立」鶴見和子・川田侃編『内発的發展論』東京大学出版会.
- 金才賢(1994)「パプア・ニューギニアにおける森林開発と先住民の土地所有—西ニューブリテン州N社の森林開発地域を事例として—」『林業経済研究』第125号:84-89.
- 鯉沼真里(1996)「ソロモン諸島国概況」秋道智彌・関根久雄・田井竜一編『ソロモン諸島の生活誌—文化・歴史・社会』明石書店.
- 国際協力推進協会(1994)『ソロモン諸島』国際協力推進協会.
- 近藤正臣(1989)『開発と自立の経済学—比較経済史的アプローチ—』同文館出版.
- Kupiainen J. (1997) The Colonial Transformation of Woodcarving in Bellona and Gatokae in the Solomon Islands, *Journal of the Finnish Anthropological Society*, Vol. 22. No. 1. : 18-30.
- 黒田末寿(1999)『人類進化再考—社会生成の考古学』以文社.
- 黒田洋一(1994)「アジア太平洋地域における森林問題の現段階と日本社会の今後のあり方を考える」『林業経済』第545号:1-8.
- Larmour P. (1981) The New Georgia Timber Corporation, Larmour P. and Crocombe R. and Taungenga A. ed. , *Land, People, and Government: Public Land Policy in the South Pacific*, Institute of Pacific Studies, University of the South Pacific.
- Lewis A. (1955) *The Theory of Economic Growth*, George Allen & Unwin.
- 前川啓治(2004)『グローカリゼーションの人類学:国際文化・開発・移民』新曜社.
- Malinowski B. (1922) *Argonauts of the Western Pacific* = 寺田和夫・増田義郎訳(1967)『南太平洋の遠洋航海者』中央公論社.
- 松林公蔵(2004)「病気とは何か?—フィールドで考えた三つのパラダイム」『エコソフィア』第14号:2-9.
- 松井健(1997)『自然の文化人類学』東京大学出版会.
- 松井健(2005)「所有の外延についての比較社会誌的覚え書き」『環境社会学研究』第11号:88-102.
- Mauss M(1925) *Essai Sur le don: forme et raison de l' échage dans les sociétés archaïques*, *L' Année sociologique*, II-1 = 有地亨・伊藤昌司・山口俊夫訳(1973)「贈与論」『社会学と人類学 I』弘文堂.
- Meadows, D. H. , Meadows, L. M. , Randers, J. and Behrens III, W. W. (1972) *The Limits to*

- Growth=大来佐武郎監訳(1972)『成長の限界』ダイヤモンド社.
- 三浦耕吉郎(2005)「環境のヘゲモニーと構造的差別—大阪空港『不法占拠』問題の歴史にふれて—」『環境社会学研究』第11号:39-51.
- 宮国淳・熊崎実(1999)「森林伐採にともなう土地利用と土地保有制度の変容—サバ州の焼畑耕作民パルアン・ムルトの場合—」『熱帯林業』45号:2-14.
- 宮本憲一(1989)『環境経済学』岩波書店.
- 宮本常一・山本周五郎・楫西光速・山代巴監訳(1995)『日本残酷物語 2: 忘れられた土地』平凡社.
- 宮内泰介(1998a)「発展途上国と環境問題—ソロモン諸島の事例から」船橋晴俊・飯島伸子『講座社会学 12 環境』東京大学出版会.
- 宮内泰介(1998b)「重層的な環境利用と共同利用権—ソロモン諸島マライタ島の事例から—」『環境社会学研究』第4号:125-141.
- 宮内泰介(1999)「ソロモン諸島: 島々を揺るがす紛争」『月刊オルタ』268号:34.
- 宮崎広和(2003)「許しの技法: フィジーの場合」宮本勝編『くらしの文化人類学 6: <もめごと> を処理する』雄山閣.
- 諸富徹(2003)『思考のフロンティア: 環境』岩波書店.
- Myint H. (1964) *The Economics of the Developing Countries* = 結城司郎次・木村修三訳(1967)『低開発国の経済学』鹿島研究所出版会.
- Myint H. (1971) *Economic Theory and the Underdeveloped Countries* = 渡辺利夫・高梨和紘・小島眞・高橋宏訳(1973)『低開発国の経済理論』東洋経済新報社.
- 中野和敬(1996)「農業と農産物」秋道智彌・関根久雄・田井竜一編『ソロモン諸島の生活誌: 文化・歴史・社会』明石書店.
- Narokobi B. (1980) *The Melanesian Way*, Institute of Papua New Guinea Studies.
- National Parliament of Solomon Islands(1999) *The Forests Act 1999*, National Parliament of Solomon Islands.
- Neufeld D. F. ed. (1976) *Seventh Day Adventist Encyclopedia*, Review and Herald Publishing Association.
- 西川潤(1976)『経済発展の理論』日本評論社.
- 西川潤(1979)『南北問題—世界経済を動かすもの』NHK ブックス.
- 西川潤(2000)『人間のための経済学』岩波書店.
- 西川潤(2001)『アジアの内発的発展』藤原書店.
- Nurkse R. (1953) *Problems of Capital Formation in Underdeveloped Countries* = 土屋六郎訳(1955)『後進諸国の資本形成』巖松堂.
- Nussbaum M. C. and Sen A. K. ed. (1992) *The Quality of Life*, Clarendon Press.
- 恩田守雄(1997)『発展の経済社会学』文眞堂.
- 大塚柳太郎・須藤健一・中澤港(2000)「ソロモン諸島地域レポート」『アジア・太平洋の環境・開発・文化』No. 1:53-58.

- 大塚柳太郎(2004)「持続的商業伐採が引き起こす社会変容」大塚柳太郎編『島の生活世界と開発(1)ソロモン諸島—最後の熱帯林』東京大学出版会.
- 大阪市立大学経済研究所(1996)『経済学辞典』岩波書店.
- Prebisch R. (1963) *Hacia una dinámica del desarrollo latinoamericano* = 大原美範訳(1969)『ラテンアメリカの開発政策』アジア経済出版会.
- Rawls J. (1971) *A Theory of Justice* = 矢島鈞次監訳(1979)『正義論』紀伊國屋書店.
- Rostow W. W. (1960) *The Stages of Economic Growth: A Non-Communist Manifesto* = 木村健康・久保まち子・村上泰亮訳(1961)『経済成長の諸段階—ひとつの非共産主義宣言』ダイヤモンド社.
- Sahlins M. D. (1972) *Stone Age Economics* = 山内昶訳(1984)『石器時代の経済学』法政大学出版会.
- 崎山理(1996)「複合的な言語状況」秋道智彌・関根久雄・田井竜一編『ソロモン諸島の生活誌:文化・歴史・社会』明石書店.
- 佐々木高明(1970)『熱帯の焼畑—その文化地理学的比較研究—』古今書院.
- 佐藤仁(1997)「開発援助における生活水準の評価—アマルティア・センの方法とその批判—」『アジア研究』第43巻第3号:1-31.
- Seers D. (1969) *The Meaning of Development*, The Institute of Development Studies at the University of Sussex.
- 関根久雄(1996)「農村社会と『開発』」秋道智彌・関根久雄・田井竜一編『ソロモン諸島の生活誌:文化・歴史・社会』明石書店.
- 関根久雄(1999)「開発のゆくえ—ソロモン諸島における『開発参加』と土地紛争」杉島敬志『土地所有の政治史—人類学的視点』風響社.
- 関根久雄(2000a)「都市と島嶼の経済開発」『国立民族学博物館報告別冊』21号:215-236.
- 関根久雄(2000b)「『カスタム』としての熱帯林—メラネシア島嶼国における開発と熱帯林の『管理』—」『林業経済研究』Vol. 46No. 1:11-18.
- 関根久雄(2001)『開発と向き合う人びと—ソロモン諸島における「開発」概念とリーダーシップ』東洋出版.
- 関根久雄(2002)「『辺境』の抵抗:ソロモン諸島ガダルカナル島における『民族紛争』が意味するもの」『地域研究論集』Vol. 4No. 1:63-86.
- 関根順子(1996)「地域医療の現場」秋道智彌・関根久雄・田井竜一編『ソロモン諸島の生活誌—文化・歴史・社会』明石書店.
- 関良基(2000)「森林の国家管理から住民管理へ」永野善子・葉山アツコ・関良基編『フィリピンの環境とコミュニティ—砂糖生産と伐採の現場から—』明石書店.
- 関良基(2001)「伐採フロンティア社会におけるコモンズの構築—フィリピンの CBFM 事業をめぐる住民意識調査から—」『環境社会学研究』第7号:145-159.
- Sen A. K. (1982) *Choice, Welfare and Measurement* = 大庭健・川本隆史抄訳(1989)『合理的な愚か者—経済学=倫理学的探求』勁草書房.

- Sen A. K. (1990) *Development as Capability Expansion*, Griffin and Knight eds. *Human Development and the International Development Strategy for the 1990s*, Macmillan.
- Sen A. K. (1992) *Inequality Reexamined* = 池本幸生・野上裕生・佐藤仁訳(1999)『不平等の再検討: 潜在能力と自由』岩波書店.
- 清水靖子(1994)『日本が消したパプアニューギニアの森』明石書店.
- 志村茂(1991)「未開の地からの都市作り—ソロモン諸島ノロ地区の産業都市開発の過程—」『*South Pacific*』No120, 日本・南太平洋経済交流協会: 2-19.
- 白川千尋(2001)『カスタム・メレン—オセアニア民間医療の人類学的研究』風響社.
- Smith A. (1776) *An Inquiry into the Nature and Causes of the Wealth of Nations* = 大内兵衛・松川七郎訳(1959)『諸国民の富(一)』岩波書店.
- Solomon Islands, Forest Policy Advisory Group (2002) *Forest Policy Recommendations Prepared For Consideration by The Minister for Forests*, Forest Policy Advisory Group.
- Solomon Islands, Ministry of Forests, Environment & Conservation(1995) *Solomon Islands National Forest Resources Inventory, The Forests of the Solomon Islands Volume Six: Western Province*.
- Solomon Islands, Ministry of Forests, Environment & Conservation(2002) *Solomon Islands Code of Practice for Timber Harvesting*, Ministry of Forests, Environment & Conservation.
- Solomon Islands, Statistics office, Ministry of Finance(1995) *Solomon Islands 1993 Statistical Yearbook*, Statistics office.
- Solomon Islands, Statistics office, Ministry of Finance(1997) *Village Resources Survey, 1995/96*, Statistics office.
- Suchman, M. C. (1995) *Managing Legitimacy: Strategic and Institutional Approaches*, *Academy of Management Review*, Vol. 20No. 3: 571-610.
- 須藤健一「国家政策に抗する森林開発」大塚柳太郎編『島の生活世界と開発(1)ソロモン諸島—最後の熱帯林』東京大学出版会.
- 菅豊(2000)「在地リスク回避論」『*アジア・太平洋の環境・開発・文化*』No. 1: 29-35.
- 菅豊(2005)「コモنزと正当性—『公益』の発見—」『*環境社会学研究*』第 11 号: 22-38.
- 鈴木継美(1980)『*人類生態学の方法*』東京大学出版会.
- 立花敏(2000)「東南アジアの木産出地域における森林開発と木材輸出規制政策」『*地域政策研究*』第 3 巻 1 号: 49-71.
- 竹沢泰子(1999)「人種～生物学的概念から排他的世界観へ～」『*民族学研究*』第 63 巻 第 4 号: 430-450.
- 玉野井芳郎(1978)『*エコノミーとエコロジー*』みすず書房.
- 玉野井芳郎(1979)『*地域主義の思想*』農山漁村文化協会.
- 田中求(1996)「山村における山と林家の関わりの変容—高知県吾川郡吾北村柳野本村集落の事例—」『*森林文化研究*』第 17 巻: 83-96.

- 田中求(2000)「花咲く焼畑の村で—ビルマ・ラカイン山脈サラインチン族の暮らし」『エコソフィア』第5号:68-69.
- 田中求(2001)「ラカイン山脈におけるサラインチン人集落の再建と焼畑によるコメ自給システム」『東南アジア研究』39巻2号:235-257.
- 田中求(2002)「ソロモン諸島における商業伐採の導入と開発観の形成—ウェスタン州マロヴォラグーン、ガトカエ島ビチエ村の事例—」『環境社会学研究』第8号:120-135.
- 田中求(2004)「ソロモン諸島における森林政策の展開と課題—商業伐採管理政策における慣習的資源所有制度の位置付けに着目して—」『林業経済』57巻2号:1-16.
- 田中求(2004)「商業伐採の導入にともなう森林利用の混乱と再構築」大塚柳太郎編『島の生活世界と開発(1)ソロモン諸島—最後の熱帯林』東京大学出版会.
- 田中求(2006)「離島無医村地域における民間医療薬の役割の動態:ソロモン諸島ウェスタン州マロヴォラグーン、ガトカエ島ビチエ村の事例」『エコソフィア』第17号:104-120.
- 田中求(2006)「日本・ビルマ・ソロモン諸島で『豊かさ』を探る」井上真編『躍動するフィールドワーク:研究と実践をつなぐ』世界思想社.
- The Dag Hammarskjöld Foundation(1975)The 1975 Dag Hammarskjöld Report on Development and International Cooperations, The Dag Hammarskjöld Foundation.
- 鳥越皓之(1997a)『環境社会学の理論と実践:生活環境主義の立場から』有斐閣.
- 鳥越皓之(1997b)「コモンズの利用権を享受する者」『環境社会学研究』第3号:5-14.
- 豊田由貴夫(2000)「メラネシア史」山本真鳥編『オセアニア史』山川出版社.
- 都築一子(1999)「北ボルネオ勅許会社統治時代の林業史(一八八八—一九四六年)—マレーシア・サバ州における商業伐採と森林保全の起源と法制化過程—」『林業経済』第614号:27-36.
- 鶴見和子(1989)「内発的発展論の系譜」川田侃・鶴見和子編『内発的発展論』東京大学出版会.
- 鶴見和子(1997)『コレクション鶴見和子曼荼羅 I 基の巻』藤書店.
- 鶴見和子(1999)『コレクション鶴見和子曼荼羅(9)環の巻—内発的発展論によるパラダイム転換』藤原書店.
- 内山節(1993)『時間についての十二章—哲学における時間の問題—』岩波書店.
- UNDP(1990)Human Development Report 1990, Oxford University Press.
- UNDP(2002)『UNDP 人間開発報告書 2002:ガバナンスと人間開発』国際協力出版会.
- 嬉昌夫(1996)「ソロモン戦史」秋道智彌・関根久雄・田井竜一編『ソロモン諸島の生活誌—文化・歴史・社会』明石書店.
- Whitmore, T. C. (1966)Guide to the Forests of the British Solomon Islands, Oxford University Press.
- World Bank(1978)World Development Report 1978, Oxford University Press.
- World Bank(1990)World Development Report 1990, Oxford University Press.
- World Bank(2001)World Development Report 2000/2001:Attacking Poverty=西川潤監訳,

五十嵐友子訳(2002)『世界開発報告 2000/2001—貧困との戦い』シュプリンガー・フェアラーク東京.

矢野眞和(1995)「国と地域の時間」矢野眞和編著『生活時間の社会学—社会の時間・個人の時間』東京大学出版会.

吉岡政徳(1994)「ビッグマン」石川栄吉・蒲生正男・梅棹忠夫・佐々木高明・大林太良・祖父江孝男編『文化人類学事典』弘文堂.

主要な現地用語の発音とその意味

- ara(アーラ): トウツルモドキ (*Flagellaria indica*)。またトウツルモドキを用いた漁。
- ara hona(アーラ・ホーナ): 堰などに魚を追い込まず、水中銃で撃つトウツルモドキ漁。
- arara(アララ): トウツルモドキの葉付きの蔓を縊り合わせた数十 m の束。
- baka edeve(ヴァカ・エンデヴェ): サゴヤシを伐倒せず、葉のみを切り取ること。
- bangara(バンガラ): 親族集団の長、統率者であり、親族集団が共有する資源の管理者。
- binorue(ビノルエ): 毒薬。
- boku(ボク): 境界。
- bonda(ボンダ): 境界。
- buni(ブニ): カロフィルム (*Calophyllum* spp.)。主要な建築用樹木のひとつ。
- buruburuani(ブルブルアニ): ソロモンカナリウムもしくはカナリアノキの半栽培地。
- butubutu(ブトウブトウ): 祖先の明確な親族集団。
- chakei(チャケイ): 守る。管理する。
- chavi mola(チャヴィ・モーラ): カヌー用の丸太の割り抜き作業、およびその手伝い。
- chero(チェロ): 採集する。拾う。
- chidi(チンディ): 石を積んだ堰。
- chigo(チンゴ): 焼畑。
- chiko(チコ): 盗み。
- chinaba(チナンバ): 漁労活動。
- chinukuna(チヌクーナ): 移植。移植した植物。
- choku(チヨク): 植える。栽培する。植え付け。
- chovuku(チョーブク): レッドシルクウッド (*Burckella obovata*)。重要な建築用樹木の 1 種。
- chuba edeve(チュンバ・エンデヴェ): サゴヤシの葉編み作業。
- chubeu(チュンベウ): モンパノキ (*Tournefortia argentea*)。
- edeve(エンデヴェ): サゴヤシ (*Metroxylon salomonense*)。屋根や壁の材料となる。
- ghaili(ガイリ): カツオの一本釣り用の疑似餌。
- goana(ゴアナ): 森林。二次林。
- goana piru(ゴアナ・ピル): 原生林。直訳すると野生の森林。
- goete(ゴエテ): カナリアノキ (*Canarium indicum*)。カナリウムナッツの 1 種。ナッツは重要な食用資源。
- gohara(ゴーハラ): 地拵え。
- goliti(ゴーリティ): グメリナ (*Gmelina moluccana*)。カヌーに用いられる樹木。
- habuhabu(ハンプハンプ): 収穫する。
- hecha(ヘチャ): 南東よりの貿易風。
- hilahila(ヒラヒラ): 目印。
- hinage(ヒナンゲ): ニツパヤシ (*Nypa fruticans*)。内壁の材料に用いられる。

hinoho(ヒノーホ):何かを持つ、享受する状態。豊かさ。転じて、気前良く振舞える状態も指す。

hirama(ヒーラマ):樹木の伐倒。

holu(ホール):買う。

hope(ホーペ):禁忌。聖なるもの。

jupe(ジュペ):二度焼き。

kale vanua(カレ・ワヌア):庭。

kapuchu(カプチュ):ビワモドキ科の1種(*Dillenia salomonensis*)。重要な建築用樹木の1種。

kekea(ケケア):恥じる。

keri ropoto(ケーリ・ローポト):棟上げ。

kinovuru(キノーブル):家系もしくは子孫。

konokono(コノコーノ):嫉妬。

kotukotuai(コトウコトウアイ):休閑林。

kuhe(クーヘ):嫉妬。

ligomo(リンゴモ):精霊との交信道具。

luju(ルージュ):トゲドコロ(*Dioscorea esculenta*)。

malaga(マールガ):貧しさ。

maria(マリア):ソロモンカナリウム(*Canarium salomonense*)。カナリウムナッツの1種。ナッツは重要な食用資源。

Mategele(マテングレ):ピチエ村の人々が属する親族集団。

meda(メンダ):バンリュウガン(*Pometia pinnata*)。主要な建築用樹木のひとつ。

minila(ミニラ):ショウガ(*Zingiber officinalis*)。重要な焼畑作物のひとつ。食用、薬用、魔除けなどに用いられる。

mohu(モーフ):濡れる。北西よりの風。

motumotu(モトウモトウ):石蒸し。

mudu(ムンドウ):イランイランノキ(*Cananga odorata*)。薬用に用いられる。

nabo(ナーボ):ウコンの複数種(*Curcuma* spp.)。薬用、魔除けに用いられる。

naginagi(ナンギナンギ):キバナイヌジシャ(*Cordia subcordata*)。重要な木彫り細工用樹木のひとつ。

ngache(ンガーチェ):トロロアオイ(*Hibiscus manihot*)。重要な焼畑作物のひとつ。

nginigo nginira(ニニゴ・ギニーラ):腹持ちのよい食物。

nginigo tapalana(ニニゴ・タパラナ):外来の購入食品。

nginira(ンギニーラ):力。強さ。固さ。

ngochara(ンゴチャラ):ココヤシ(*Cocos nucifera*)。

ngocharaini(ンゴチャライニ):ココヤシ林。

noru(ノロ):筋が通ったもの、状態。直線。正しさ。

nunu(ヌーヌ):地震。

palavanua(パラワヌア): 村、とくに居住域。

pela(ペラ): 人の嫉妬心を好む悪霊。

picha toka(ピチャ・トーカ): カナリウムナッツの殻割りの手伝い。

picha varilegu(ピチャ・ヴァリレーグ): 樹木の巻き枯らし。

piki(ピキ): 荒起こし。

pinausu(ピナウス): 養子。

poda(ポンダ): 精霊。霊能力。

poda vamanoto(ポンダ・ワマノト): 相手の怒りを鎮める霊能力。

poda vadoma(ポンダ・ワドーマ): 罵ろうとする相手に声を出させなくさせる霊能力。

pokipoki(ポーキポキ): 除草。

popa(ポパ): 乾燥。

popoara(ポポアラ): 食べ物の贈与。

popoara soa mae(ポポアラ・ソア・マエ): お返しとしての食べ物の贈与。

puchu puchu(プチュプチュ): バジルの1種(*Ocimum* sp.)。薬用に用いられる。

rao(ラオ): 樹木の伐倒。

riga(リンガ): 洪水。

rigi(リンギ): インドシタン(*Pterocarpus Indicus*)。重要な木彫り細工用樹木のひとつ。

rihe(リヘ): コクタン(*Diospyros* sp.)。重要な木彫り細工用樹木のひとつ。

roroto(ローロト): ある集団の成員と結婚した他集団出身者。

ruta(ルタ): タロイモ栽培を行う水田。

ta chori(タ・チョーリ): 恥じる。

talo(タロ): タロイモ(*Colocasia esculenta*)。重要な焼畑作物のひとつ。水田でも栽培される。

tamadi(タマンディ): 父方の親族。

tamaturana(タマトウラナ): 父母兄弟姉妹、従兄弟、従姉妹などを含む近縁集団。

tatamana(タタマナ): 家族。

tatavete(タタヴェテ): 利用。利用すること。

tavete(タヴェテ): 働く。働きかけ。

tinadi(ティナンディ): 母方の親族。

tinoni(ティノーニ): 人。ときに成人男性。

tinoni jamajama(ティノーニ・ジャマジャーマ): 代弁者。調停者。スポークスマン。

tinoni pa goana(ティノーニ・パ・ゴアナ): 森の人々。森林・山を居住地とし、タロイモ栽培を行う人々。首狩りの対象。

tinoni pa indere(ティノーニ・パ・インデレ): 海の人々。海辺を居住地とし、森の人々の首を狩り、人食を行っていた。

tinoni poda(ティノーニ・ポンダ): 霊能力者。

tinoni poraporana(ティノーニ・ポラポラーナ): 様々な技術に長け、深い知識を持つ村人。

toka(トーカ): 助け。助けること。

totarendi(トータレンディ): 自生植物。
tuari(トウアリ): 昔。伝統。旧習。
tulageni(トウランゲニ): オオウナギ(*Anguilla marmorata*)。
tuti(トウティ): 家系。
umalau(マラウ): サツマイモ(*Ipomea batatas*)。重要な焼畑作物のひとつ。
uvi(ウヴィ): ダイジョ(*Dioscorea alata*)。重要な焼畑作物のひとつ。
uvikola(ウヴィコラ): キヤツサバ(*Manihot esculentum*)。重要な焼畑作物のひとつ。
vabokae(ワボカエ): 敬う。
valusa makasi(ワルサ・マカシ): カツオの一本釣り漁。
vanua(ワヌア): 家屋。
vari betoani(ワリ・ベトアニ): 分け終えた場所。
vari mekai(ワリ・メカイ): まとまり。統一性。
varisuru(ワリスール): 火入れ。
vasara(ワーシヤラ): ニューギニアヴィテックス(*Vitex cofassus*)。主要な建築用樹木の1種。
vataholu(ワタホール): 売る。
vinakarua bangara(ヴィナカルア・バンガラ): 第二のバンガラ。
vinamagua(ヴィナマグア): 許し。寛容さ。
vinangira(ヴィナンギラ): 禁漁。禁猟。
vinari tokae(ヴィナリ・トカエ): 相互扶助活動。
vusivusi(ヴシヴシ): ケチ。わがまま。利己的。

主要な登場人物・親族集団(アルファベット順)

- Bale(バレ): 母タンバラはマテングレ集団であるものの、bangara となれる VP 集団ではなかった。ビチエ村の西部、マランジーイシュー間の bangara となることを主張するもビチエ村住民らに拒否され、他出。
- Bilei(ビレイ): 1934 年のヴァンゴロの死後、マテングレ集団の bangara となる。1998 年死去。商業伐採の導入に反対。
- Billy Boy Kioto(ビリー・ボーイ・キオト): マロヴォ島チエア村出身であり、マテングレ集団ではなかったが、ブロ島の所有権を主張し、敗訴。
- Bilus(ビルス): ヴァンゴロの次男であり、マテングレ集団の tinoni jamajama(スポークスマン)。2002 年に死去。1964 年から、弟ククーらとともにヴァングヌ島東南部の Lot8 を政府に貸与。
- Buna(ブナ): 父ロマサ、母スングともに他島出身であり、マテングレ集団ではなかったが、マテングレ集団の女性タンバラと結婚。その長女がペンテコ、長男はバレ。
- Ferol(フェロール): ビルスの長女セシリアの長男。魚販売を積極的に進める。
- Harron(ハローニ): ヴァンゴロの次男ビルスの長男。1998 年からマテングレ集団の bangara のひとり。
- Ian(イアニ): ヴァンゴロの三男ククーの長男。ペンジユク村のチーフであるものの、商業伐採をめぐる土地紛争に嫌気が指し、ビチエ村に居住し続けている。
- Issac(アイザック): マテングレ集団でホニアラ在住。ヴァンゴロの長女ヴェラバナの長女ベジータの夫。前ペアヴァ村チーフ。息子プレスリーとともにガトカエ島および周辺地域での商業伐採を積極的に推進。2006 年死去。
- Jay(ジェイ): 初代 bangara であるティナマナエの長女テパミディの長男。弟ンゴアとともに 2 代目 bangara となり、ガトカエ島西部の統率者となった。
- Johenson(ジョヘンソン): パカの次男セーサラの長男。2002 年のビルスの死後、マテングレ集団の tinoni jamajama。
- John Tomau(ジョン・トウマウ): マテングレ集団でありペアヴァ村出身。プレスリーとともに JP 社を設立。ガトカエ島を始めとして、マロヴォ・ラグーンの各地で商業伐採を進める。
- Kuku(ククー): ヴァンゴロの三男であり、タルジルの弟ノブの死後、マロアナ集団の bangara となる。カツオ漁に用いる疑似餌作りの名手。
- Kulmola(クルモラ): マテングレ集団ではなかったが、妻ノセサンベの妹リプラーロがパカの長女イアサンベと結婚し、ビチエ村に居住するようになり始めたらしい。詳細は不明。イアサンベの子ヴィラとメギーを養子にする。
- Kutumana(クトウマナ): ヴァングヌ島出身であり、マテングレ集団ではなかったが、霊能力があるとされ、モナカの養子となる。妻はテテ。パカの長女イアサンベの子セーサラとジョイスミナを養子にする。

- Maroana(マロアナ)集団:ヴァングヌ島東南部の親族集団。ヴァンゴロの妻タルジルは、マロアナ集団の bangara であった。
- Mategele(マテングレ)集団:ガトカエ島の親族集団。
- Monaka(モナカ):19世紀後半のマテングレ集団の bangara。強い霊能力者として畏れられ、とくに悪霊に憑依された村人を見つけ出し、殺害する能力に長けていた。家出した妻の両手両足を切り落として殺害。
- Ngoa(ンゴア):初代 bangara であるティナマナエの長女テパミディの次男。兄ジェイとともに2代目 bangara となり、ガトカエ島東部の統率者となった。
- Nosesabe(ノセサンベ):父はラッセル諸島出身、母はガダルカナル島出身。マテングレ集団ではなかったが、弟リプラーロがパカの長女アサンベと結婚したことから、ビチェ村に居住し始めたらしい。詳細は不明。
- Paka(パカ):19世紀末から20世紀初めにかけてのマテングレ集団の bangara のひとり。霊能力を持つとされ、首狩りにおける統率者でもあった。マテングレ集団のキリスト教徒化には反対し続けた。1928年に死去。
- Papae(パパエ):ヴァンゴロの長男。1934年のヴァンゴロの死後、第二の bangara となる。1956年死去。
- Penpio(ペンピオ):ヴァンゴロの長男パパエの長男。1991年から、マテングレ集団の bangara のひとり。ペンピオは第二の bangara に過ぎないとする村人もいる。
- Presley(プレスリー):マテングレ集団でホニアラ在住の弁護士。ヴァンゴロの長女ヴェラバナの長女ベジータの長男。ペアヴァ村のチーフの座を父アイザックから受けつぐ。伐採企業と提携してJP社を設立し、ガトカエ島、ヴァングヌ島、ニュージョージア島などで商業伐採を進めるも、各地で訴えられ敗訴。
- Pudi(プンディ):マテングレ集団でペンジュク村出身。ビチェ村出身のマテングレ集団の女性ジョイスミナと結婚。ペンジュク村での商業伐採の導入に尽力するも、村人らから訴えられ敗訴。農作業の雇用労働グループ作りの首謀者のひとり。
- Rosemary(ローズマリー):マテングレ集団でホニアラ在住の看護師。1990年代に魚販売を試行したほか、製材機を購入してガトカエ島各地で製材を進め、2001年から製材機をビチェ村に譲渡。
- Salad(サラッディ):マテングレ集団でありビチェ村出身。魚販売を積極的に進めるも、販売利益の着服疑惑をかけられる。
- Simeon(シミオン):父母はヴァングヌ島出身でありマテングレ集団ではなかったが、ペンジュク村のチーフであると主張して商業伐採を導入するも、村人らに訴えられて、敗訴。
- Solen(ソリーニ):ヴァングヌ島出身。マテングレ集団でビチェ村出身のフェロールの妻。ヴァングヌ島で行われた商業伐採の伐採権料を受け取ったことでビチェ村住民の嫉妬を受ける。
- Tarujiru(タルジル):ヴァングヌ島東南部のマロアナ集団の bangara。首狩り集団であったマテ

ンゲレ集団の bangara であったヴァンゴロと結婚。

Tesi(テシー) : パカの長男。1956 年のパパエの死後、マテンゲレ集団の第二の bangara となる。
1991 年死去。

Tinamanae(ティナマナエ) : マテンゲレ集団の初代 bangara。bangara となったのは 18 世紀半と
考えられる。

Vagolo(ヴァンゴロ) : 19 世紀末から 20 世紀初めにかけてのマテンゲレ集団の bangara のひとり。
霊能力を持つとされ、首狩りにおける統率者でもあった。マテンゲレ
集団のキリスト教徒化を推進した。妻はヴァングヌ島東南部のマロアナ
集団の bangara であったタルジル。1934 年に死去。

Veala(ヴェアラ)集団 : ヴァングヌ島西部の親族集団。かつては、マテンゲレ集団の人々の首
狩り、人食対象となっていた。

Waital(ワイタール) : マテンゲレ集団であるビチェ村出身の女性メリリと結婚したガダルカナル
島出身の男性。グメリナへの印付けによる優先利用権の主張を始めた。
2001 年に自宅の建築のために相互扶助を村人らに依頼するも拒否され
る。農作業の雇用労働グループ作りの首謀者のひとり。

主要な略語・略称

BN: Basic Needs(基本的必要)の略。生活における衣食住など基本的必要を意味する。

D 社: マレーシア系の伐採企業 Delta 社の略。2003 年から 2004 年にかけて、ペンジユク村で商業伐採。

E 社: オーストラリア系の伐採企業 Emmett Logging Ltd の略。2000 年に、ポレレで商業伐採を行う。

EM 社: マレーシア系の伐採企業 Earth Movers 社の略。マレーシア・サラワク州に本拠を置く Lee Ling Timber Co. の子会社。

GH 社: フィリピン系の伐採企業 Golden Harvest 社の略。2000 年から 2002 年にかけて、サゲオナ村で商業伐採。

GS 社: インドネシア系の伐採企業 Golden Springs International Ltd.の略。社長はインドネシア・東カリマンタンの Sumber Mas Timber Group のインドネシア人。1998 年以降、ソンビロ村やビリ村などで商業伐採。

HDI: Human Development Index(人間開発指数)の略。「人間」を中心においた発展を標榜する UNDP が発展指標として作成。「長寿で健康な生活」「知識」「人間らしい生活水準」の測定を試みる発展指標。

ILO: 国際労働機関(International Labor Organization)の略。

IMF: 国際通貨基金(International Monetary Fund)の略。

JP 社: ペアヴァ村出身のプレスリーとジョンが商業伐採を導入するために設立した地元会社 JP Enterprises Ltd の略。1997 年から PP 社などと提携して、ポレレで商業伐採。

M 集団: ガトカエ島の人々の多くが属している Mategele(マテングレ)親族集団の略。

MEF: マライタ島出身者らで構成された武装組織 Malaita Eagles Force の略。

NIEO: 新国際経済秩序(New International Economic Order)の略。1973 年の国連資源特別総会で採択された。

O 社: マレーシア系の伐採企業 Omex 社の略。2000 年から 2001 年にかけてペンジユク村で商業伐採。

PM 社: マレーシア系の伐採企業 Pacific Metro 社の略。2003 年から 2004 年にかけて、ビリ村で商業伐採。

PP 社: マレーシア系の伐採企業 Panpacific Ltd.の略。1996 年にブロ島、1997 年以降、ポレレなどで商業伐採。

RAMSI: the Regional Assistance Mission to the Solomon Islands の略。2003 年以降、オーストラリアを中心に形成されたソロモン諸島地域支援ミッションであり、治安回復や違法行為の取り締まりを行っている。

SDA: セブンスディ・アドベンティスト(Seventh Day Adventist、安息日再臨派)の略。

SID: Solomon Islands Dollar の略。ソロモン諸島の通貨。

SP 社: マレーシア系の伐採企業 Sylvania Products 社の略。マレーシアの Kumpulan Emas Berhad の子会社。

SS 社: マレーシア系の伐採企業 Samling San 社の略。2003 年から 2005 年にかけてサゲオナ村やペンジュク村で商業伐採。

UNDP: 国連開発計画 (United Nations Development Programme) の略。

UNICEF: 国連児童基金 (United Nation Children's Fund) の略。

ワルサ漁: ピチエ村の人々が行ってきたカツオの一本釣り漁、valusa makasi (ワルサ・マカシ) の略。

VP 集団: Mategele (マテンゲレ) 集団の bangara であったヴァンゴロとパカを祖とする親族集団の略。

WWF: 国際協力 NGO である World Wide Fund for Nature の略。

謝辞

本稿を執筆するなかで、ビチェ村の人々の姿が頭から消えることは無かった。筆者がビチェ村に居候し始めた2001年1月には、まだ生後2週間であったバリ、その姉のジネン、モニタ、アニタ、そしてフェロール・ソリーニ夫妻。教科書、辞書のないマロヴォ語を教えてくれたのも彼ら、彼女らであった。

昔のことを根掘り葉掘り聞く筆者をいつも温かく迎えてくれたビルス・ラオサ夫妻、その息子のハローニ。この5年の間に亡くなってしまった人たちもいる。

たくさん子ども、にいちゃん、ねえちゃん、おっちゃん、おばちゃん、じいちゃん、ばあちゃんたち、みな筆者の父母兄弟姉妹、子どもであり、友であり、仲間であり、そして師匠であった。ありがとう。

ビチェ村に戻りたい、という気持ちは、とにかく早く博士論文を仕上げようという気持ちにさせてくれた。ビチェ村の人々とのつながりは一生切れることは無いだろう。

筆者が聞き取り調査を主要ツールにしたフィールドワークに興味を持ったのは、井上真氏によるインドネシア研究に触れる機会があったことがそのきっかけである。それ以来、井上氏には12年余りにわたり、フィールドワークのみならず、論文の執筆、研究に対する姿勢全般にご指導いただいた。

筆者がこれまで行ってきたフィールドワークの多くは、井上氏からいただいた機会を活かしたものであった。結婚後は、良き父としてまた夫としての井上氏の姿から学ぶこともまた多かった。感謝の言葉は尽きない。

また永田信氏は、熱く暴走しがちな筆者を優しく見守ってくださり、ときに鋭い指摘でヒヤリとさせてくださった。暑苦しく泥だらけになって這い回るフィールドワークから帰った筆者に、研究の深さ、もどかしさに冷静に対応する姿勢を植え付けてくださったのも永田氏である。また薩摩白波を飲んで酩酊することしか知らなかった筆者に、日本酒のおいしさを教えてくださったことにも感謝している。

修士・博士課程を通じて、井上・永田両氏のもとで思う存分、研究に打ち込むことができたのは本当に幸運であり、自らの成長にも結びついたと考えている。

初めてのフィールドワークを行った高知県吾北村に送り出してくださったのは、石橋整司氏であった。同氏および高知大学の古川泰氏の尽力により、吾北村では、地区長であった筒井俊夫氏や黒石利武氏を始めとする、やさしくあったかい人々たちに出会うことができた。吾北村での毎日は、フィールドワークとはこんなに目から鱗がぼろぼろと落ちるものなのか、と感じるものであった。

村の廃校に住み込んで2ヵ月余りが過ぎ、年が明けて卒業論文の発表会まで数週間となっても帰京しない筆者を温かく見守ってくださり、また村人の視点で政策を捉えなおすこと、表現媒体としての論文の持つ強みも教えてくださったことにも、感謝している。こんなに汚い測量図は見たことが無いとあきれつつも、全林毎木調査では筆者の大雑把さを、むしろ貴重だと褒めてくださり、筆者に(おそらく誤った)自信を与えてくださったのも同氏であった。

ご多忙にも関わらず、副査を快諾して下さった菅豊氏にも感謝している。同じ研究プロジェクトの一員として、菅氏の報告から刺激を受けることは多かった。

また、菅氏の論考を取り入れることで、勉強不足の目立つ拙論に深みを加えることができ、同氏に拙論をぶつけてみたいという思いが執筆を進ませてくれた。さらに、菅氏と篠原徹氏との師弟関係は、筆者にとって羨ましく理想的なものであった。ぜひ見習っていきたいと考えている。

関根久雄氏は、筆者がソロモン諸島に興味を持つきっかけを与えて下さった方である。ソロモン諸島での調査対象地域の選定においても、関根氏のアドバイスがなければ、ビチェ村の人々と出会うことは無かったであろう。筆者の調査の激励に、荒波を越えてビチェ村まで来て下さったこともある。

2004年からは、筆者を特別研究員 PD として受け入れてくださり、ソロモン諸島研究の先輩として、ことあるごとに的確なアドバイスと多くの情報を与えて下さったことにも感謝している。

また本研究は、日本学術振興会未来開拓学術研究推進事業「地域社会に対する開発の影響とその緩和方策に関する研究」(代表、大塚柳太郎)の調査員として、2001年から2002年にかけて筆者が行った調査および、日本学術振興会特別研究員 PD として文部科学省科学研究費補助金(平成16-18年度)「ソロモン諸島における慣習的資源利用制度を活用した地域発展の検討」のなかで行っている調査研究の成果の一部である。

プロジェクトリーダーであった大塚柳太郎氏は、根拠の無い自信にあふれ、酔うたびに絡む筆者を温かく見守って下さった。ソロモン諸島での調査費確保、調査許可取得のために大塚氏のご尽力が下さったことで、安心して心置きなく調査を進めることができた。短期間ではあったものの大塚氏とともにフィールドに入ったことは、筆者にとって貴重な経験となった。教授としての教育活動や雑務に追われながらも、精力的にフィールドとの往還を繰り返す大塚氏の姿勢は、ぜひとも見習いたい。

また、須藤健一氏、中澤港氏、山内太郎氏、古澤拓郎氏、緑川泰史氏、石森大知氏、福嶋理栄子氏、クリシュナ・パハリ氏らソロモン諸島研究班のみなさま、松井健氏、篠原徹氏、菅豊氏、鬼頭秀一氏を始めとするプロジェクトメンバーの方々からは、調査、研究方法において多くの示唆を受けた。ここに記して感謝したい。

林政学研究室の同期学生であった大松美帆氏、奥山洋一郎氏、笹岡正俊氏、柴崎茂光氏、名村隆行氏らを始めとする林政学研究室、そして井上ゼミの学生の方々からは、ゼミ発表の際のみでなく、ときに酒を酌み交わしつつ、多くの刺激をいただいた。良き仲間にも恵まれたことに感謝したい。

林政学研究室の先輩である立花敏氏、田村早苗氏、横田康裕氏、原田一宏氏、芝原真紀氏、安村直樹氏、柏村恒氏、卒業後においても、筆者をいつも笑顔で迎え入れてくれた事務の荒井和子氏、川合あけみ氏にも感謝している。

そして、博士課程1年時より伴侶として筆者の日常生活、研究を支え続けてくれた妻、美保子に感謝したい。結婚直後から、東南アジア、ソロモン諸島での長期調査を繰り返す筆者の

わがままを、(ときに不満を漏らしつつも)許し続けてくれなければ、拙稿が書き上がることはなかったであろう。

書き上げればきりが無いが、飛び立ったままなかなか着地点の定まらない筆者の拙論を温かく、ときに厳しく見守ってくださった多くの皆様方すべてに感謝してやまない。

論文の内容の要旨

本研究の目的は、ソロモン諸島ビチェ村を事例に、ローカル・コモンズを基盤とする地域社会の動態を地域発展に向けた試行錯誤過程として捉えなおし、ローカル・コモンズがどのように関わりながら地域発展を進めていくのかを明らかにすることである。

ソロモン諸島では、地域の資源を生活基盤として共同利用するなかで、労働力や技術、知識を相互に提供し合える、という信頼を共有する成員のネットワーク(以下、相互利用ネットワーク)が形成されている。本研究では、ローカル・コモンズを「地域社会の基盤である自然資源と、それを共同利用する人々が形成する相互利用ネットワーク、およびこれらの利用制度」と定義する(図1)。

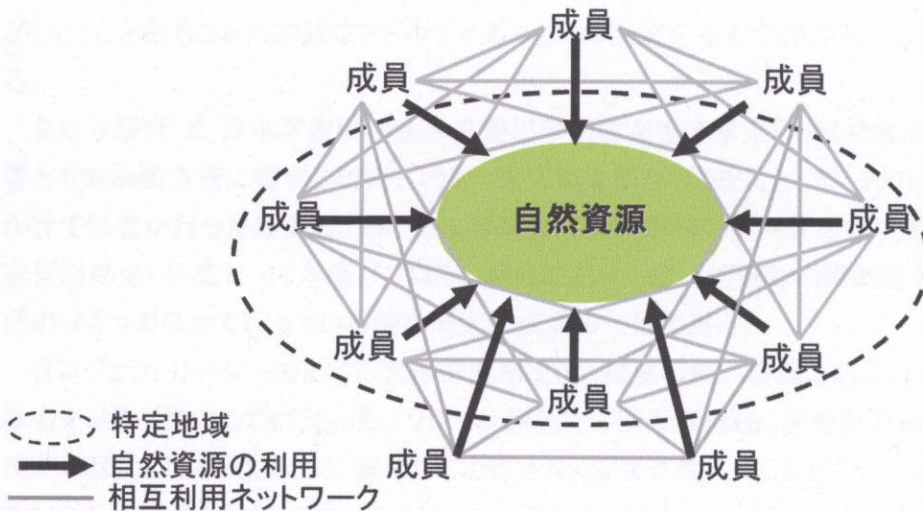


図1 ローカル・コモンズ概念図

注) 特定地域とは、自然資源を基盤として形成された集落や村レベルの地理的な広がりを指す。

序章では、既存の発展論を批判的に検討し、地域発展を地域社会の人々が求める「豊かさ」に向かう過程とし、指標や普遍的な目標に縛られない、多様な地域発展を描くための視点を設けた。そして地理的な枠に限定されないローカル・コモンズと、外部社会との関わりの中でのその動態を把握するために、相互利用ネットワークによって形成されたローカル・コモンズ概念図を提示した。

第1章では、商業伐採管理を中心に展開してきた森林政策における慣習的資源所有の位置付けを探った。

20世紀前半のココヤシ農園開発とともに進んだ商業伐採から、戦後の慣習地の保留林指定と政府取得地での商業伐採、丸太輸出による独立政府の財源確保のための商業伐採増加へと変容するなかにおいても、慣習的資源所有は維持され続け、各地域の親族集団が商業伐採の導入主体のひとつとなっていたことを明らかにした。ソロモン諸島は、法的にも実質的にも慣習的資源所有が認められてきた数少ない地域のひとつと位置付けられるのである。

第2章では、ビチェ村を対象に1915年のキリスト教徒化から1950年代までのローカル・コモンズの動態を探った。

キリスト教徒化にともない、ガトカエ島を四分化する境界(以下、四分化境界)が決められ、各地区にチーフが任命された。しかしながら、村人の資源利用において四分化境界が意識されることはなく、マテンゲレという親族集団(以下、M 集団)全体でガトカエ島の資源が共同利用されていた。

ガトカエ島の野生の動植物・魚介類は、M 集団全体に「成員利用権」が認められていた。成員利用権とは、何らかの集団の成員であれば生得的に認められる共同利用権のことである。

さらに「優先利用権」が認められていた資源もある。優先利用権とは、森林の伐開や野生植物の移植など、資源に何らかの「働きかけ」を行うことで認められる優先的な利用権のことである。M 集団であれば優先利用権を得ることができたのは、焼畑用地および栽培・半栽培植物であった。栽培植物の収穫については、栽培者が独占的に行っていたものの、収穫物は村人全体で共同調理され、他村者にも贈与されていた。

相互扶助も盛んに行われ、ココヤシの収穫時には他村に暮らす M 集団成員も来村し、共同労働に加わった。村人同士で雇用労働を行うことはなかった。ビチェ村の人々は、M 集団という繋がりを基に資源を共同利用し、また無償での相互利用ネットワークを形成していたのである。

第3章では、1960年代から1990年代前半までのローカル・コモンズの動態を明らかにした。1980年代半ばまで、ビチェ村の資源は他村者の利用が認められていた。しかし、主収入源であったコプラの買い取り価格の低迷にともない、木彫り細工や魚介類などが代替収入源となるにつれて、ビチェ村内でのこれらの資源の販売目的での利用は、基本的にビチェ村住民のみに認められることになった。また外国漁船の操業、船外機の導入にともない、魚の贈与・分配も衰退した。

第4章では、商業伐採の導入要因をローカル・コモンズの視点から明らかにするとともに、商業伐採後のローカル・コモンズの混乱について説明した。

ビチェ村の人々は、人口増加にともなう教育費の増加と新たな焼畑用地、収入源の必要性から、商業伐採の導入を決めた。商業伐採の雇用労働には多くの村人が参加した。しかしながら、出来高制の伐採労働は過伐の原因となり、村に建材不足をもたらした。また村人は、伐採権料の金額への不満と、複数の村人が行った利益の着服により、相互に不信感を抱くようになった。

第5章では、商業伐採終了後に導入された製材販売において試行されたローカル・コモンズの再構築過程を明らかにした。

2001年には、村人による小規模伐採と製材、都市部での製材品の販売(以下、製材販売)が始まった。製材品は M 集団で共同利用され、また日常的な相互扶助に支障がないような作業班が形成された。しかしながら、製材販売は2002年末に中断することとなった。商業伐採時に雇用労働が行われて以降、村内での活動についても、対価としての現金の支払いが求められるようになり始めていた。村人は、利益の多くが製材機の修理費用に充てられ、労賃が支

払われないことに嫌気が差し、参加を拒むようになったのである。

第6章では、ローカル・コモنزの動態から見てきた、村人が形成した正当性概念とその変容の方向性を明らかにし、正当性概念に則った魚販売の試行過程について考察した。

村人が正当(noro)とする共通認識(以下、noro 概念)は、1)資源の共同利用を認め、収穫物を贈与・分配する「気前の良さ」、2)相手を強く非難することを禁忌とし、誤りに罰則を加えない「寛容さ」、3)自己利益のみを追求しない「相互扶助」意識、4)資源の「豊かさ」を享受し、また優先利用権の主張にも結びつきうる「働きかけ」の重視、であった。

noro 概念を共通認識とする「核」はビचे村住民となり、他集団に対しては、雇用労働や厳格さを含む利用規制、境界の強調、ケチ(利己的)な対応という「したたかな壁」が形成された。また「核」内部にも問題が生じていた。旅行者の減少により木彫り細工の販売が難しくなり、村人の主収入源は、余剰農作物販売のみになっていた。そこに伐採企業が商業伐採契約を持ちかけた。多くの村人が商業伐採の再導入に反対したものの、密かにサイン料を受け取った村人4人によって伐採契約が結ばれ、村内部に不和が広がることとなった。さらに1980年代以降、船外機を利用して魚を獲るようになった村人らは、ガソリン代がかかっていることを理由に、他の村人に魚を販売するようになった。

2003年時、村人らはこのような状況に不満を持ち、住民間の不和を解消し、気前の良い漁獲物などの贈与・分配を活発化しつつ、現金収入を獲得していく「豊かさ」を求めている。

そこで試みられたのが魚販売であった。魚販売は、保冷箱に村で買取った魚を入れて運び、都市部で販売するプロジェクトであった。

魚販売の開始は商業伐採契約の破棄を後押しし、住民間の不和を解消に向かわせることになった。しかしながら、当初計画していた村全体での共同漁労、余剰漁獲物の分配という気前の良い振舞いや相互扶助は行われず、一部の村人による利益の着服は、新たな住民間の不和を生み出した。さらに天候不順による不漁が続いたほか、都市部では同郷者から気前の良い振舞いとしての魚の提供が求められ、減益に結びつくこととなった。

終章では、noro 概念を基盤とするローカル・コモنزが内包する地域発展の阻害要因と困難さについて考察した。

ビचे村におけるローカル・コモنزを基盤にした地域発展とは、外部社会と関わって現金収入などを獲得しつつ、noro 概念に則ってローカル・コモنزを再構築していく過程であった。

「地域の自然資源に関わろうとする外部者、および外部者らが対象とする資源とその管理制度」を「外部者の資源管理」と呼ぶこととしよう。外部者とは、ローカル・コモنزにおける相互利用ネットワークの外部にいる者であり、地域のいずれの資源に関しても成員利用権が認められていない者を指す。

「外部者の資源管理」が対象とする自然資源やその管理制度は、ローカル・コモنزのそれと完全に重なり合うわけではない。ローカル・コモنزと「外部者の資源管理」が部分的にすり寄り、また離れつつ資源管理のあり方を探る一方で、ローカル・コモنزとそこに関わろうとする外部者が基盤になり、地域発展を模索していくのである(図2)。

ローカル・コモنزと「外部者の資源管理」は、豊かさ(もしくは貧しさ)に向かう力に引っ張ら

れながら、動き続けることになる。この動態の過程こそが、地域発展(衰退)なのである。

商業伐採の密契、伐採権料や魚販売利益の着服を厳しく非難しない寛容さは、「負の寛容」とも言い換えられる。寛容さを求められるがゆえに不満が表出することは稀であるものの、相互利用ネットワークの基盤となる信頼関係が崩れていくことに繋がっていく。また気前の良さが求められることによる、都市部での魚の提供は、減益の原因となっていた。さらに「働きかけ」の重視は、魚販売において漁に出た者のみが利益を得られるという主張に結びつき、気前の良い魚や利益の贈与・分配を妨げることになった。

noro 概念の4要素は、その活発化もしくは強調が村人の求める「豊かさ」に結びつくこともあれば、また地域発展を妨げる負の要素にもなっていた。ローカル・コモンズを基盤にした地域発展は、ローカル・コモンズ自体が内包する要素が正と負の両側面を持ち、地域を混乱や衰退にも向かわせるという困難さを持っているのである。

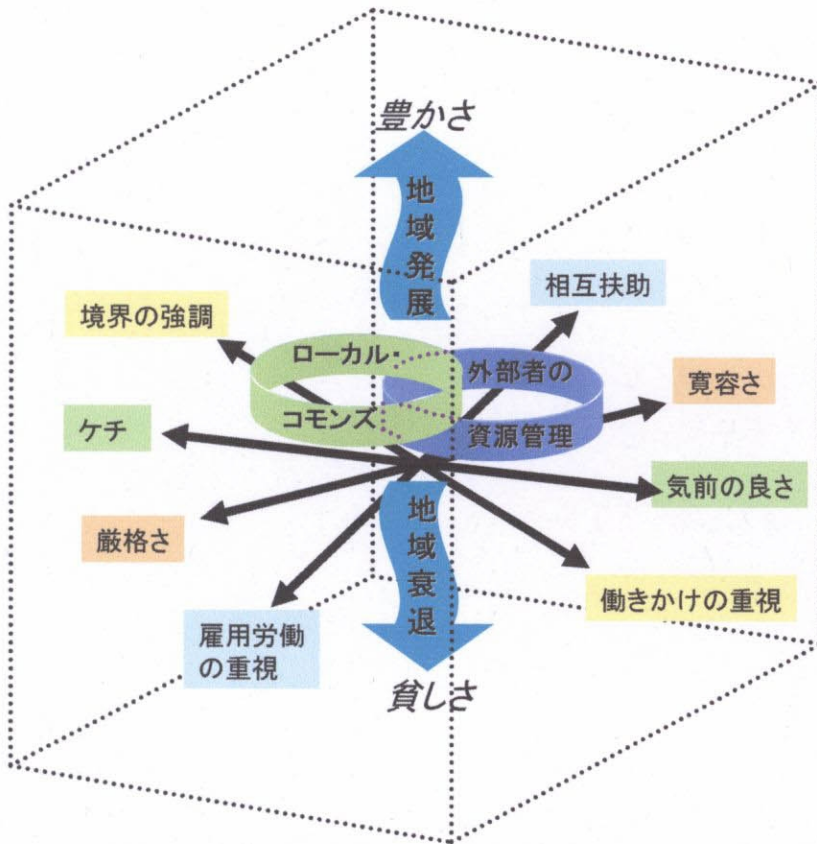


図2 ローカル・コモンズと外部者の資源管理を基盤にした地域発展モデル

注) 外部者がローカル・コモンズにおける相互利用ネットワークに加わっていくことで、外部者の資源管理が地域発展の基盤となっていくこともイメージしている。

「気前の良さ—ケチ」、「寛容さ—厳格さ」、「相互扶助—雇用労働」、「働きかけの重視—境界の強調」の4本の軸は、地域社会(部分的に外部者を含む)を地域発展にも、地域衰退にも進めうる上向き、ときに下向きに変わる上下可変的な軸である。